

**国府台・大塚・筑波から
アジヤへの発信を**

前附属中学校長 齋藤佐和



3年間のフランス留学を終え、1970年8月東京教育大学教育学部附属リハビリテーション教育研究施設・聴覚障害部門助手として現職の国府台校に採用されたことは、私の人生における最も大きな幸運でした。筑波大学卒業後、入国専門学校として1年を過ごした後、強く希望して1979年学校教育研究センターに異動して以来、1989年からは大塚地区夜間修士課程担当も兼ね、最後まで1週間は国府台・大塚・筑波を分割して過ごす生活に終結しました。1998年からは附属中学校長、加えて2004年度からは特別支援教育研究センター長を務めることになりました。苦勞もありましたが充実した日々を過ごすことができました。長い年月の間に出会い、共に働き、支えていただいたすべての皆様に深く感謝いたします。

附属中学校は常に研究の発祥の地でした。また、特に大学と連携して長年国府台で行ってきた実践型の内留生現職研修は、日本の聴覚障害教育を支える手筈のある、やりがいのある仕事でした。これはセンターの現職教員長期研修事業に引き継ぎましたが、さらに専門職大学院へと発展してほしいと切望しています。特別支援教育は、これら幼小・中・高校を巻き込んで展開されます。センターを築き手として、障害教育5校だけでなく附属小・中・高、駒場、坂戸の学校教育、職業教育の実践力、附属学校教育協会の教育相談事業の実績とタイアップして、また大学の連携協力を得て、日本の学校教育について幅と奥行きのある筑波モデルが発信されることを強く願っています。世界へ、と言いたところですが、まずは制度、感性において親和性のあるアジヤへの発信を特に期待します。

ご挨拶

附属中学校長 四日市章



筑波大学附属中学校長としてこの4月より勤務することになりました。附属中学校は創立以来130年有余の歴史をもつ学校です。これまでに、数え切れないほど多くの聴覚障害者、聴覚障害教育に携わる教員や研究者を育ててきました。また、我が国唯一の大学附属中学校として、この教育の将来に向けてどのような責務を果たしていけばよいかを考え、本校教職員が一人ひとりが率先して取り組んでまいりたいと思っております。大学の法人化を初めとして、附属中学校を取り巻く社会的な状況の変化は、本校の進むべき方向性と意義を社会に対して明確に示すことを求めています。在学中の多くの子どもたちの充実した成長発達を支援する教育機関としての役割を果たすとともに、聴覚障害教育が現在直面している課題の解決に向けての試み、さらに、これからの聴覚障害教育を展開していくための新たな視点と努力が求められていると思っております。大学や特別支援教育研究センター、附属中学校教育、附属障害教育センター等の関連組織との連携協力を強め、情報の充分な交換を図りつつ、日々の実践に努めたいと考えております。どうかよろしくお願い申し上げます。

新任ご挨拶

附属坂戸高等学校長 中村 徹



このたび、附属坂戸高等学校長として着任いたしました。高等学校の現場は、40年近く自ら高校を卒業して以来です。ここで、高校教育には全くの素人です。皆様方のご支援・ご指導をお願いいたします。高校に就任しますと（といっても週一回ですが）、目新しいことばかりでもっとも新鮮に感じられます。まず、高校の先生方がとても熱心だということです。大学の先生方より、どちらかというと教育よりも研究に力注ぎることが多いのに対し、高校では、先生方はまずすぐに高校生と向き合っており、熱心に教育しているのが伝わってきます。教科の教育だけでなく放課後の部活等も含めて、とても「濃く」生徒と関わっています。とくに坂戸高校では、農場実習や工場実習など普通高校にはない実習が多いので、先生と生徒は特別仲がよいようです。

生徒たちがとても素直で目がかややしている、というの長いこと大学にいた人間にとって目新しいことです。大学生も1年生の1学期には、確かに自らを知らせているのですが、夏休みが終わって2学期になると、もう先輩たちと変わってきます。高校生は、明るく素直で、先づやかな印象を受けます。高校生をかかわいと感じしまうのも歳のせいばかりではないようです。しかし、新鮮だ、と浮かれていた訳にはいきません。このご時世、附属学校には厳しい話ばかり聞かれます。とくに、坂戸高校は生き残りをかけて全校一校一校となつて様々な工夫・努力をしておりますが、状況はなかなか厳しいものがあるようです。ここでも皆様方のご支援・ご協力をお願いしなければなりません。お願いばかりして、新任のご挨拶に代えたいと思います。

附属桐が丘養護学校に着任して

附属桐が丘養護学校校長 安藤隆男



筑波大学附属桐が丘養護学校は、昭和33年4月、東京教育大学教育学部附属養護学校として開学し、およそ半世紀の歴史を有しております。この歴史は、まさに戦後の肢体不自由教育の萌芽・発展と軌を一にするものであり、わが国で唯一の私立大学附属の肢体不自由養護学校として、当該教育の発展・充実と寄与してきたところであります。

さて、本年3月に学校教育法等の一部を改正する法律案が国会に提出され、特別支援教育は、これを構想し制度設計する段階から、いよいよ本格的な導入・実施の段階に移行したからです。しかし、走りながら体制を確立・整備していかなければならない特別支援教育に対しては、全国の実情において、まだまだ多くの混乱と不安の声があるのも事実です。附属桐が丘養護学校に着任した私に、実に多くの関係者から激励の言葉を頂戴しました。附属桐が丘養護学校は、肢体不自由教育のみならず、特別支援教育の発展・充実と資するため、これまで培ってきた専門性を継承しつつも、新たに求められる専門性を追求し、具現しなければならないことを強く意識せざるを得ません。「新しい校長先生だ!」屈託なく、明るく声をかけられる子どもたちを前にして、私どもにも課せられた使命を明確に意識し、教職員や保護者とともにこれを実現する道筋について、希望をも語り合いたいと感じる毎日です。



名物先生 vol.5

**附属中学校の名物先生
— 角田陸男先生 —**

山口 正

本校の名物先生を紹介いたします。角田陸男先生は、本校に勤めて今年で31年目になります。担任を4回、主任を2回経験され、附属中学校表も表も隔から隔まで把握していらっしゃる方です。最初に先生が教えておられたのは、現在40代半ば、親子2代にわたって担任という例はいくつもあります。先生の担当は理科の第1分野で、専門は物理、先生のごが名物かは、授業をこなすにあれば一自瞭然。指導技術はもろろんのこと、生徒を引きつける話術、発言を誇りにされている演義実験、計算しつくされた授業展開のなかに「驚く」と「納得」の連続と50分の授業があつという間に過ぎてしまいます。毎日が「スペシャルな



附属中学校教員 山口 正

授業」とおっしゃるとおり、実によく練られた計画の展開には、生徒ばかりでなく、参観された先生の誰もが感心しどしどします。時に発せられる感心い言葉にも、様々な配慮が隠れており、学校全体を見え隠れした発言とつながっています。また、日々綿密な準備を怠らぬ先生は、様々な実験器具を製作しています。実験室の奥には、数多くの手作りの実験器具が所狭しと保管されています。

現在、教務主任であり、学年主任であり、サカウー部の顧問であり、現役の選手でもあり、まさにマルチな名物先生は、現在はも日々学びを実践しておられます。是非、本校の名物先生の授業を参観してみて下さい。生徒の心を捉える先生の魅力を実感できることでしょう。

温故知新

筑波大学附属小学校校史資料室

附属小学校 山下真一

筑波大学附属小学校の1号館2階にある校史資料室は、本校の創立百周年記念事業の一つとして、昭和48年(1973年)に設けられてきました。その後、新しい資料を加えて毎年充実してきました。

- ここには、明治9年(1876年)の第1回卒業生(卒業生名簿を初め、本校の歴史と伝統を示す多くの資料が収録・展示されています。
- 主な資料としては、次のようなものがあります。
- 1. 本校の歴史が一目で分かる年表
- 2. 時代ごとの学生生活の様子を写した写真
- 3. 児童の文集・国語・算数などの作品
- 4. 教育課程や教育研究資料

展示された資料は、本校の歴史を物語るだけでなく、我が国の教育の歴史や教育研究の足跡を知るためになくてはならないものになっています。また、多くの作品の中には、有名な賞状もたくさんあります。例えば、元内閣総理大臣であった宮澤喜一郎氏が書いた作文やバハマ太平洋博覧会に出品された中島健蔵氏(大正4年卒)の作品があります。

本校には、この資料室以外にも貴重な資料がまだ整理されないままでも保管されています。今、大学と連携しながらこれらの資料の整理を行っている最中です。



TOPICS 1

2020

韓国の学校の施設設備に感心!

附属桐が丘養護学校副校長 吉沢祥子

桐が丘養護学校では、研究活動の一つとして、学校現場での電子黒板の有効活用の研究に取り組んでいます。また、この2月、韓国国立又進養護学校が、同じ国立の養護学校として何か連携協力できる様な糸口を探しに29日まで本校を訪れたので、その際も会場、3月26日から2日に我が校の大ホール・レクリエーション(1)を租み、ソウル市内にある私立小、公立中、公立養護学校と又進養護学校の計4校を訪問、各学校での電子黒板設置利用状況と関連するIT機器の使い方の工夫などを見せてもらいました。普通学校では国策と云うこともあり、特別教室を含む教室に電子黒板がある。国や自治体、学校が主体となって様々なコンテンツの充実を図りにしているという印象を受けました。公立養護学校では言語訓練室と幼児教室の2室までの設置であったが、他の施設設備の充実度には目を驚かされた(地下1階、地上5階、校内にスタター、アシナージュムまで完備)。どの学校の校長先生も、IT機器も便利だが教育の根幹はやはり教師の情熱だと言われ、この点では、我が校も勝るとも劣らないと自負するものである。



あじやからと